

- 1・治療と楽しみの両面から患者さんを支える、栄養管理部
 - ・診療科レポート「乳腺・内分泌外科」
 - ・季節のお話／メタボ対策
- 2・言語聴覚士のご紹介
 - ・退職のご挨拶
 - ・ナディック通信

- 3・名大病院歴史探訪
 - ・平成28年度名大病院災害訓練
 - ・携帯電話及びスマートフォンの使用について
 - ・ボランティアさん募集
- 4・体の不調や未病のケアに。治療のもう一つの選択肢、漢方。
 - ・ミニニュース
 - ・健康講座「それ、貧血ではありませんか？」
 - ・禁煙のお願い
 - ・かわらばん HPのご案内

名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。
 基本方針 ● 一、安全かつ最高水準の医療を提供します。 一、優れた医療人を養成します。
 一、次代を担う新しい医療を開拓します。 一、地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます



TOPICS ① 治療と楽しみの両面から患者さんを支える、栄養管理部

安全で満足度の高い食事の提供、治療への貢献を柱に、患者さんの治療を栄養面から支える栄養管理部。リスク管理をはじめ部全体を統括する部長の葛谷雅文教授と現場で指揮を執る管理栄養士の田中文彦副部長に、活動の特色について伺いました。

がん患者さんへの栄養指導も

栄養管理部の業務は、入院患者さんへの食事提供、栄養管理、入院・外来患者さんへの栄養指導、チーム医療への参画などがあげられます。栄養管理では、入院時に患者さんの状態や食物摂取状況などを評価し、栄養状態の悪い方に対しては早い段階で管理栄養士が介入できる体制を敷いています。また、栄養指導では食事の取り方などを指導し、実際の食事例がわかるように参考文献やフードモデルを使って具体的に把握していただけるよう説明しています。

対象となる患者さんの疾患は幅広く、生活習慣病はもちろん、肝臓病、膵臓疾患、クローン病、潰瘍性大腸炎、妊娠高血圧症、アレルギー疾患など。最近では外来の化学療法部と連携して、がん患者さんへの栄養指導も積極的に行っています。

2つの栄養サポートチームが活躍

チーム医療の面では、多職種が参加する栄養サポートチーム（NST）を運営しています。その特色は、複数の診療科の医師、歯科、口腔外科の医師、看護師、薬剤師、言語聴覚士、管理栄養士からなるNSTと、それを支援する少数精鋭のサポートタイプNSTの2チーム制を敷いている点にあります。各チームが週1回ずつ、合計2回、患者さんのベットのサイドを訪問し、身体や栄養の状態を確認。その上で問題点へのアプローチ方法を話し合い、食事や経管栄養、点滴、薬など栄養療法の計画を立て、主治医に提

案しています。2チーム制のため確認の間隔が短く、よりきめ細かく継続的な栄養管理につながっています。

楽しく食べていただくために

病院内は治療の一環ですが、入院中の楽しみでもあります。患者さんにお食事を少しでも楽しんでいただくようと、一般食は選択メニューのほか、お子さん専用のメニュー、誕生日食、出産お祝い膳なども用意。ご希望があれば各フロアにある病棟患者食堂もご利用いただけます。また、年1回、患者さんに食事満足度調査を行い、調査結果を検討した上で、味つけや調理法の工夫などの改善に努めています。

一方、食欲がない患者さんも多いため、各病棟担当の管理栄養士が患者さんから食べられない理由や好みをお聞きし、食事の変更や、栄養補助食品の追加などを提案して何とか食べていただけるよう努力しています。

今後は年々、高齢化が進む患者さんに対応し、さらなる嚥下食の充実を図っていきます。また、退院される患者さんの情報を次の施設に渡して病院間で連携するなど、地域での栄養管理も視野に活動を広げたいと考えています。



季節のお話

体重が増えてズボンの腰回りが苦しくなった経験はありませんか。お腹の中の脂肪、すなわち内臓脂肪が増えると血糖や血圧が上昇しやすくなります。これがメタボリックシンドローム（いわゆるメタボ）と呼ばれる病態です。したがって内臓脂肪を減らすことができれば血糖や血圧も低下することが期待できますが、減量はなかなか難しいですね。本当は内臓脂肪を減らしてくれるお薬があればいいのですが、現状では患者さんの努力（食事療法と運動療法）にかかることになります。

ここで大切なことは「一に食事、二に運動」と順番があることです。一生懸命運動をしても食事療法をおろそかにすると減量には繋がりません。運動で消費するカロリーよりもお菓子やジュースに含まれているカロリーの方がしばしば多いためです。

「継続は力なり」と言いますが、毎日節制することは大変だと思います。つい食べ過ぎてしまった日には投げやりにならず、「こんな日もあるさ」と気持ちを切り替えて翌日からまた食事療法に取り組んでください。また、寒い日が続きますが、足元に注意しながら運動療法もぜひ継続してください。



メタボ対策

糖尿病・内分泌内科 教授 有馬 寛

診療科レポート「乳腺・内分泌外科」

乳腺・内分泌外科 講師 菊森 豊根

乳腺・内分泌外科は、乳癌などの乳腺疾患の診断治療、甲状腺・副甲状腺・副腎・膵臓といったホルモンをつくる臓器（内分泌臓器）の腫瘍性病変（しこり）の外科治療（手術）に当たっています。これらの病気の多くはホルモンの変動をきたしたり、その影響を受けて手術後にホルモンの補充やホルモン治療が必要となります。診断、治療に際して内分泌学的知識が必要で他の外科とはやや異なっています。また、乳癌を始め、他の腫瘍も女性に多く発生するのが特徴です。

乳癌は現在、女性の癌の中で一番多く発生するものになっています。マンモグラフィ（乳腺のレントゲン写真）を用いた検診がかなり普及してきて、早期の乳癌が多く見つかるようになってきています。しかし、早期が故に画像検査でわずかな異常しか認められない場合などで、切除する範囲を決定することが難しい場合が多くなっています。放射線科と共同で先進的な画像融合技術（図1）により正確な切除範囲を決定できるようになっています。

甲状腺や副腎の腫瘍（図2）に対する専門的な外科治療を行うための施設が東海地区には少なく、

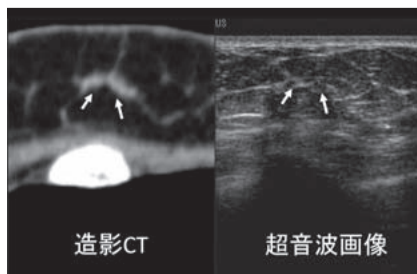


図1 リアルタイムバーチャル超音波画像造影CTで矢印で示されている病変を同期された超音波画像で確認できます。超音波画像のみでは見逃されるほどの軽微な所見です。

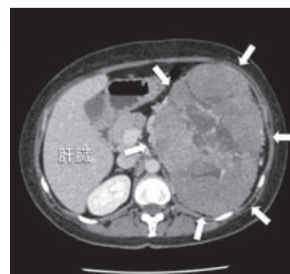


図2 矢印で囲まれているのが左副腎腫瘍

当科はこの地区における最後の砦として治療に当たっているという自負と責任を感じています。その一方で当科における女性医師の比率は3分の1で、他の外科より女性医師の比率が高く、女性に多い疾患に対する治療に当たる診療科として、患者さんに優しい治療を提供できると考えています。

言語聴覚士のご紹介

リハビリテーション部 言語聴覚士 原 大介

言語聴覚士の仕事は「嚥下（飲み込み）」「聞こえ」「ことば」「高次脳機能」に障害を持つ方へリハビリテーション支援をすることです。そのように言ってもなかなかイメージしにくいのが実情ではないかと思えます。

しかし、「誤嚥性肺炎」もしくは「老人性肺炎」という言葉は、昨今の超高齢化社会の到来に伴い、テレビや新聞などのメディアで取り上げられる機会が多くなってきているため聞いたことがある方も多いのではないのでしょうか。

「誤嚥性肺炎」とは、その名の通り高齢者や手術を受けた直後など体力が低下している方が、飲み物や食べ物・唾液などを飲み込んだ際に誤って気管に入ってしまう肺炎になってしまいます。肺炎そのものでも命の危険にさらすこともある怖いものですが、安静を余儀なくされ、筋力低下や褥瘡（床ずれ）が生じてしまい、さらに入院期間が長くなってしまふという悪循環に陥ってしまう二次的な問題も生じてしまいます。このような誤嚥性肺炎を予防するために重要な飲み込む力を適切に評価し、入院患者さんそれぞれの飲み込む力にあった食事提供や食べ方の提案、必要であれば飲み込みのリハビリを行うことで支援させていただくことが我々言語聴覚士の役割の一つです。

当院では飲み込む力の評価にNS-T活動（栄養サポートチーム）の一

環として、リハビリドクター、嚥下認定看護師、言語聴覚士を中心に週2回、ほぼ全病棟を対象に主科より依頼のあった患者さんに対して嚥下回診を行っております。これにより、主治医、病棟看護師、言語聴覚士、栄養士など他職種で情報を共有し専門職それぞれの専門性が発揮されより良いサービスが提供できているものと思えます。

また、「飲み込み」以外の「聞こえ」

「ことば」の障害や「高次脳機能障害」の支援として人工内耳装用者の方への装用指導・聴取訓練・聴力検査、音声訓練・失語症・高次脳機能障害の評価・訓練を中心に、GCU・NICUに入院されている子供への哺乳訓練などが該当します。

話す、聞く、表現する、食べる…。誰でもごく自然に行っていることが病気で、事故、加齢などで不自由になります。また、生



まれつきの障害で困っている方もいます。こうしたことばによるコミュニケーションや飲み込みに問題がある方々の社会復帰をお手伝いし、自分らしい生活をおくるための支援ができるように、知識・技術はもちろんのこと患者さんの思いを受け止めることのできる豊かな人間性を備えたチームとして活動できるように努力していきたいと考えております。

退職のご挨拶

総合診療科長／教授 伴 信太郎

本年3月末で名古屋大学を退任します。名大病院に総合診療部を立ち上げて18年余り、今から思えばあつという間でした。

総合診療科は「全ての健康問題の窓口」となることができる診療科です。多くの専門科が存在する医療機関でも約10%の患者さんは所属科不明です。それ故、総合診療科は、一般の常識とは反対に、大きな病院ほど必要と言えます。

また、総合診療医は各科医師から教えていただくことでその能力を高めることができます。

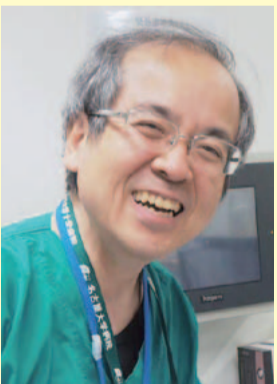


その意味で、名大病院総合診療科で学べたことは私自身にとつて非常にありがたいことでした。名大病院の先輩・同輩・後輩の皆さんに感謝の意を表して退任の挨拶といたします。

外科系集中治療部長／病院教授 貝沼 関志

外科系集中治療部長、病院教授の貝沼関志です。65歳となり定年退職のご挨拶を申し上げます。外科系集中治療部は難易度の高い手術のあと、とても忙しい時期に患者さんが生命危機を脱し自力で食べたり歩いたりすることができると見通しができるまで診療をさせていただくところ。完全に治るつもりで手術に入られる患者さんを支えてなんとかご家庭にお返ししようと頑張ってきました。私の

診療能力も現在が頂点にあるところですが、これも世の定め、一旦名大を辞し、培った力を皆様により寄り添った地域の病院で生かすつもりです。今後ともよろしく、お願い申し上げます。



Nagoya Disease Information Center ナディック通信



患者情報センター（広場ナディック）では地域連携・患者相談センター主催のナディック「患者の集い」を行っています。患者の集いでは毎回がんや肝疾患などの病気に関する情報の提供や患者さんとの交流会を行っています。また、入院や治療で感じる緊張を少しでもほぐして頂きたいという思いからストレッチや中国体操、脳トレなどリラクゼーションの時間も設けています。1月は脂肪肝、2月はアピアランスケアをテーマに講義や交流会を行いました。今後も月に1回様々な企画を予定しておりますので、お気軽にご参加ください。詳しくは院内の掲示もしくは地域連携・患者相談センターまでお問い合わせ下さい。



開催場所 中央診療棟2階 広場ナディック
開催日時 毎月1回 13:30～
参加方法 事前申し込み不要 参加費無料
(問い合わせ先 地域連携・患者相談センター 052-744-2663)

特集 TOPICS **3**

名大病院歴史探訪 其の7

名大病院の始まりは、1871（明治4）年に旧名古屋藩評定所跡に設けられた仮病院です。2014年に鶴舞町への移転百周年を迎えた名大病院の歩みを医学部史料室（医学部図書館4階）の所蔵品によりご紹介します。

大都に遊学の念止まず — 後藤新平① —

先見性を持ち、壮大な発想から「大風呂敷」と呼ばれた政治家 後藤新平（1857-1929）は、陸奥国胆沢郡塩釜村（現 岩手県奥州市水沢区）に、伊達家の臣下である留守家の家士 後藤実崇と利恵の長男として生まれました。1869（明治2）年に胆沢県大参事（副知事）として水沢に赴任した安場保和（1835-1899）は、新平の祖母の里方に宿泊したことから、新平を見る機会が多く、この少年の凡人でないことを見抜いて書生とし、後に、部下の阿川光裕（1845-1906）に預けました。新平は阿川の勧めで福島第一洋学校を経て、須賀川医学校に学びます。阿川は新平の学費を支給し、生活の面倒も見ていましたが、学費で衣食、月謝などすべてを支払うため、苦学力行の学生生活でした。新平が医学校の生徒取締の事務を行いながら、見習医員として働いていたある夜、女郎屋から客が腹を切ったという連絡がありました。先生が留守でしたので代わりに行ってみると、あたり一面の血の中、男が2寸（約6cm）ほど腹を切っています。新平は、切った腹からはみ出した腸をなんとか押し込もうとしますが、患者がうんと力む拍子にまた腸が出てきます。そばの人にも手伝わせてどうにか押し込めて縫うことが出来ましたが、この時ほど困ったことは無かった、という話を後年、秘書に語っています。

新平が、名大病院の前身である愛知県公立病院に来ることになったのは、恩人である安場が愛知県令として、阿川が愛知県十一等出仕（臨時の員外官）として名古屋にいたことと、それ以上に「大都に遊学の念小時も止まず」、オーストリアの名医ローレツ（Albrecht von Roretz 1846-1884）と、医師であり語学の天才として知られた司馬凌海（1839-1879）が公立病院にいたからです。1876年、19歳となった新平は名古屋の阿川邸にしばらく下宿しました。図1は、ローレツの依頼に応じて、愛知県出身の浮世絵画家である柴田芳洲（1840-

1890）が絹本に顔料で描いた絵です。片膝立ちで執刀するのが後藤新平、左端の襷掛けでスキンネル・マスクを用いたクロロホルム麻酔を行っているローレツはこの時はまだ30代前半でした。和服で患者の腕を支えるのが司馬凌海、洋服でスプレーを持つのが早川養順と伝えられています。クロロホルム麻酔下での手術を視覚的にとらえた記録として、日本の近代外科史上、最古に属すると言われています。この絵は、学内にとどまらず様々な出版物や映像などで活用され、漫画（図2）にもなっています。

（医学部図書館 蒲生英博）



図1 「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」 1880年ごろ



図2 「後藤新平」（まんが岩手人物シリーズ）1989年



また、災害対策本部では、8月6日に開催された愛知県主催の「大規模地震時医療活動訓練」の反省点を踏まえ、実践的な訓練が行われました。

このような訓練は災害拠点病院である名大病院として不可欠であり、毎年継続していくことにより、災害マニュアルがより充実したものとなることが期待されます。

11月8日（火）、平成28年度名大病院災害訓練を行いました。名古屋市内で震度6強の地震が発生し、本院に傷病者が続々と押し寄せるといった想定で、災害対策本部の設置、病棟等各部署の被害状況点検・報告、トリアージの受け入れ・救護・診療ブースの立ち上げなどについて訓練しました。

参加者は医師、看護師、医療技術者、事務職員等220名以上あり、トリアージ訓練では、医学部保健学科及び医療系専門学校の学生約110名が模擬患者としてムラージュ（外傷などを模造したゴム・ラテックス製の特殊メイク）を施して参加しました。

平成28年度名大病院災害訓練



■ ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

- ボランティアホームページ
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1411/volunteer.html>



携帯電話及びスマートフォンの使用について

名大病院では、医用電気機器への電波影響を防止するとともに、迷惑通話を防止し、静かで落ち着いた院内環境を保持するため、携帯電話及びスマートフォンの使用について必要な事項を定めています。詳しくはホームページでお確かめください（<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1385/1512/goraiinnominasama.html>）。なお、通話は、「通話可能エリア」及び公衆電話BOXに限って可能です。付近の方々に迷惑にならないように、ご配慮の上ご利用ください。ご理解とご協力をお願いいたします。

体の不調や未病のケアに。治療のもう一つの選択肢、漢方。



本院では西洋医学の最先端医療を追求する一方で、漢方によるアプローチも行っています。漢方の特色について、総合診療科の漢方専門医である佐藤寿一先生にお聞きしました。

独自の考え方から病態にアプローチ

漢方は、患者さんの病態を西洋医学とは異なる視点で捉えて治療を行います。その患者さんが持っている本来の健康な状態と現状とのずれを評価しそのずれを整える、あるいは、健康な状態がゆらぎ始めた時に早めにケアをするという考え方のもと、治療を進めていきます。

診察も漢方独特のもので、舌の状態や顔色などを診る望診、声やにおいなどを確かめる聞診、患者さんの自覚症状を聞く問診、脈や腹部などからだに触れて状態を診る切診の四診を行い、患者さんの状態を把握します。さらに、気・血・水の流れや滞りを診るなど、西洋医学とは違う概念で患者さんの状態を捉えて処方を行います。

さまざまな病態で活用される漢方薬

現在、漢方が処方される病態は非常に増えています。例えば、月経困難症や月経痛など婦人科系疾患に対する三大漢方とされるのが、当

帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸。認知症で怒りっぽくなる症状を抑えるには抑肝散。外科手術後に腸の動きが悪い場合は大建中湯がよく処方されます。他にも消化機能が不全や精神的な落ち込みなど、漢方は多様な症状に効果があり、また、がん患者さんの体力増進にも使われます。

漢方にはその人の体格や体質を表す概念があり、弱々しい感じの人を虚証、元気が感じの人を実証と分けて、同じ病気でも患者さんの体質によって処方を変える(同病異治)のが特色です。薬の種類によって効き目のスピードも違います。例えば風邪のとき、葛根湯を飲むとすぐに体がポカポカしてくるように、即効性のあるものもあれば、体質をゆっくり改善していくものもあり、目指す治療によって効果の表れかたが異なります。

よくわからない不調を感じたときに

漢方薬は高いというイメージをお

持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、保険診療であれば自己負担は3割です。西洋医学では疾患毎に薬が出されるので多くの薬を服用しなければならぬ場合もしばしばありますが、患者さんが示す全身の状態に応じて処方する漢方では薬が1〜2種類で済む場合が多いです。西洋医学では体の不調の原因がわからないという場合も、漢方なら解決の糸口が見つかるかもしれません。漢方には病気になる前の体の不調(未病)に対する治療もあり、何となく不調を感じている人にもおススメです。冷えやのどの詰まり感など、西洋医学ではアプローチしにくい病態も漢方の得意とするところですので、そのような時は漢方を扱う病院やクリニックにかかってみてはいかがでしょうか。当院でも漢方を処方しています。西洋医学にも漢方医学にも良い点があり、両方の視点から患者さんの状態に適した治療を見極めて診療しています。

ミニニュース

「コンサート」を開催しました
中央診療棟2階ピアノ広場にて、10月25日(火)に「MT4」、11月17日(木)に「ドリーム」はな歌友の会、12月12日(月)に「ファミーユクラリネットクワイア」、12月20日(火)に「八木さん・戸塚さん」の方々によるコンサートが開催されました。それぞれが趣向を凝らした演目となっており、多くのご来院の皆様に参加いただきました。



▲10月25日に行われたコンサート

▲11月17日に行われたコンサート



▲12月12日に行われたコンサート

▲12月20日に行われたコンサート



禁煙のお願い

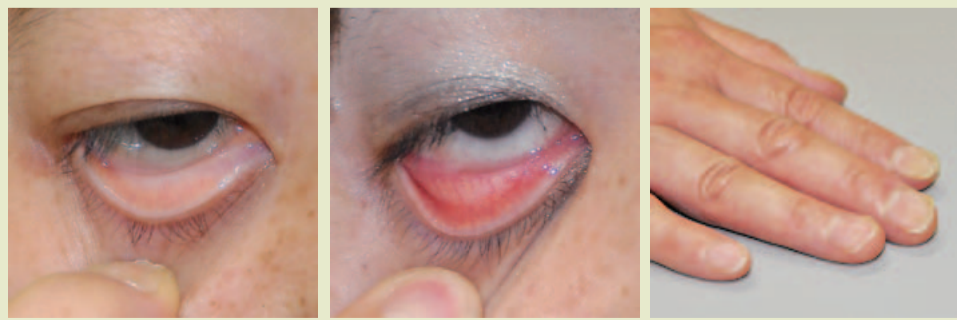
患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

「それ、貧血ではありませんか？」

血液・腫瘍内科 教授 清井 仁

「貧血」は、血液の中の赤血球が足りなくなっている状態です。よく立ちくらみと貧血が同じような意味で使われていますが、立ちくらみは脳に行く血液の量が少なくなる状態で、貧血がなくても起こります。赤血球は全身に酸素を運んでいきますので、貧血になると体の様々な部分が酸素不足になります。そのため、心臓はたくさんの血液を送り出して足りない酸素を届けようとするために、脈拍数を増やします。普段から心臓に負担がかかっているため、少しの運動でもすぐ疲れたり、息が切れたりします。しかし、これらの症状は貧血がゆっくり進むと感じないこともあるた

め、運動不足や年齢のためだと思われがちです。貧血は様々な原因で起こりますが、最も多いのは鉄の不足です。鉄が足りない事による症状で気づかれることもあります。爪がスプーン状にくぼんだり、舌の粘膜が萎縮してひりひりした痛みを感じたり、口角炎ができたりしていませんか？氷などがやたらと食べたくなっていませんか？貧血があれば、顔の裏の色が白っぽくなっています。一度鏡の前で見えてみて下さい。また、貧血は鉄の不足以外にも様々な原因でおこります。気になる症状があれば早めに受診して下さい。



貧血時

治療後

鉄が足りない貧血時の爪